

浜中町のワカメ養殖事業の現状

四十三年度概報

増殖部 川嶋 昭 二

浜中町管内のワカメ養殖は昭和四十三年に道委託事業として本格的に試験事業が始められて以来、毎年着業者数もふえ、それにつれて生産額も増大して、今や皆さんの大きな関心の的になっています。特に四十三年度は今までにない成果をあげて、企業化への基礎が固まつたように考えられます。しかし、今後は種苗供給、漁場開拓、流通などの難問をかかえており、しかも他組合と互に協調して考えなければ、これらの問題の解決は難しいことが当然予想されますので、ほんとうの企業の安定はこれからだと言つても過言ではありません。

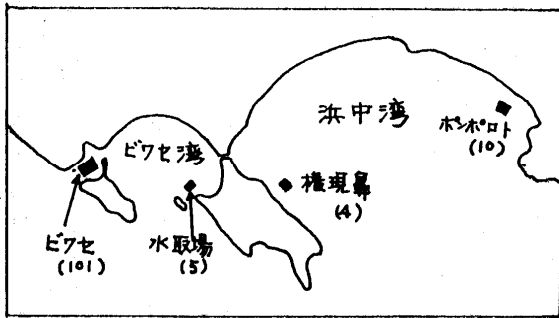
今回はとりあえず、四十三年度の養殖結果を中心に概要を紹介します。

昭和四十年以降の浜中漁協管内の養殖概況は才一表に示したとおりです。これを見て判

るように、毎年経営体数・台数が増加しそれに伴つて生産量・金額が伸びています。

特に四十三年度は、四十二年に比較して台数で二・一倍増ですが、生産量では約四倍に達したことは、結局一台あたりの収量が約二倍近くに増加したことによるものです。生収あたり単価は約〇・七二倍に下つていますが、これは根室など他地区からの生産も増加したことから考えると当然のことです。今後の流通対策上問題になる点ですが、それにしても四十年や四十二年のように二九〇円前後の平均単価はむしろ異状であつて、これからは四十三年度程度の二百円前後を維持できれば上等ではないかとも考えられます。

浜中漁協管内での養殖漁場は大きく分けてビワセ湾と浜中湾に大別されますが、今のところビワセ湾の方が施設保持上有利であり、



第4図 43年度ワカメ養殖漁場
(数字)は養殖台数

第1表 浜中漁協ワカメ養殖実績

年度	経営体	台数	生産量 生 Kg	生産金額 円	@	1台あたり	
						Kg	円
40	1	7	326.4	82,579	253	47	11,797
41	7	34	1464.4	423,170	289	43	12,446
42	16	56	4,589.1	1,349,700	294	82	24,102
43	36	120	17,997.5	3,852,601	214	151	32,375

(註) 40年度は他に6経営体、24台が試験事業を行なっているが、実績が不明のため除いた。

かつ生長も優れる傾向がみられます。これにくらべると浜中湾は波浪による筏の破損、葉体の流失などが多く、また漁協として一般が利用するためには、研究の余地が残されてい

ます。四十三年度の漁場は才一箇に示したようにピワセ湾二カ所、浜中湾二カ所でしたが、このうちほとんど大部分(一二〇台のうち一〇一台)はピワセ地先漁場に集中しています。筏は水平式が大部分で、ピワセ地先以外で試験的に延縄式が用いられています。いづれも筏の長さは三〇mで、水平式では養殖繩三本、合計九〇m(根室漁協では五四m筏で養殖繩の長さは一六二m)のものを利用してあります。種苗は従来どおり根室漁協人工採苗場から供給を受け中間種(五月三十日採苗)は八月二日に、遅種(六月二日採苗)は八月二十二日に移植、水平式ははさみ込み、延縄式はまきつけて本養成しました。しかし種苗の供給量は十分ではなく、特に予定した早種が入手できなかつたので、一般用は全部遅種を利用しました。

水平式一台あたりの種苗糸は三〇mを基準とし、総量は三、七八〇mとなつています。

◇ ◇

養殖期間中の生長度は、ピワセ湾水取場地先と浜中湾権現鼻地先の試験筏で行ないました。ここでは水平式筏についての概要を述べます。まず中間種では水取場の生長が早く、全長(各株の最大長の平均で示す。以下いづれも同様)一mに達したのは十月中旬ごろ、

これに対し権現鼻地先では下旬ごろでした。これは八一九月の生長初期のおくれが影響したようです。水取場では十一月下旬に一三七cmに達していますが、権現鼻では九七cmで前月より短くなりました。同様に葉重量(莖や胞子葉をのぞいた重さ)が一〇〇gに達したのは、水取場で十月下旬でしたが、権現鼻では同時期で七〇gぐらいで、それ以後も一〇〇gに達せず終つたようです。しかし一株あたりの発生本数は採取期の十一月中、水取場で八〇九本、権現鼻で九〇十八本と後者が多かつたために一株あたりの総葉重量では二五〇g/三四〇gぐらいの範囲内で、あまり大きな差は見られませんでした。

次に遅種では二回しか調査されていないため、確かなことは不明ですが、早種との関係や従来の結果などから総合的に考えて見ますと、全長一mに達したのは水取場では十一月初めごろ、権現鼻では十一月下旬ごろと考えられます。しかし葉重量が一〇〇gに達したのは水取場ではおそらく十一月末か十二月に入つてからではなかつたかと考えられます。また、権現鼻では最後まで一〇〇gに達しなかつたかも知れません。一株あたりの発生本数は水取場は早種とほぼ同じで、総葉重量も十二月二十一日で四五〇g(最高九〇〇g)

に達しておりました。また権現鼻では、発生本数は二〇本以上もあつたために一本あたりの重量は少なかつたわりに、総葉重量では十一月中旬で三〇〇gに達しています。

◇ ◇

四十三年度の全生産額については、さき述べたように約一八トン、三八五万円と過去四年間の最高を記録しましたが、ここでは同じ漁場、同じ筏（水平式）での例として、ピワセ地先の三十三経営体についての結果の一部を紹介します。

ピワセ地先では経営体あたりの台数は、最高六台（二経営体）で、以下五台（一）、四台（七）、三台（一三）、二台（七）、一台（三）、合計一〇一台、平均三・一台の経営規模です。また生産量、金額は筏の持台数、一台あたり収量、出荷当日の市場単価などによつて決りますので単純に比較できませんが、最高は一、二四四kg、二六六、五二〇円（四台）で、これを含め、二〇万円以上の生産金額をあげたのは四経営体、一〇万円台が十二経営体、一〇万円以下が一七経営体（このうち収量〇、又はそれに近いもの、それぞれ一経営体を含む）になつています。

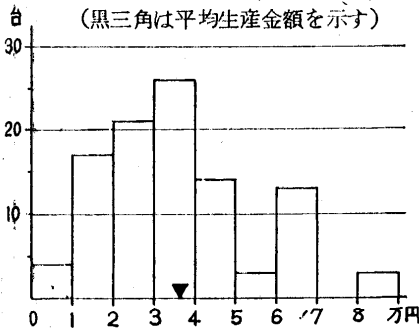
次に各経営体ごとに一台あたりの平均生産量と生産金額を求めてみますと最高四三六kg、

八七、一六〇円（一経営体、一台）、平均一七一・五kg、三六、一九五円といふかなり良い成績をあげています。これらを各段階別に示したものが才二図ですが、生産量でも、金額でも、従来の道東地方のワカメ養殖の実績を上廻つていることがわかります。なおこれらのワカメ採取、出荷の期間は十月十七日～十二月二十日の約二カ月間でした。これらの出荷の状況については改めて報告したいと思います。

浜中町のワカメ養殖事業は四十三年度の成果を基にして、ますます発展の傾向を見せています。しかし、事業の拡大にあつては台数の増加よりも内容の向上を計ることの方が先決だと思ひます。また個人の生産向上のほか、全体の安定した生産計画、販売対策にも意を用いることが大切でしょう。

才2図の2

1台あたり生産金額別の実績台数
(ピワセ漁場)
(黒三角は平均生産金額を示す)



才2図の1

1台あたり生産量別の実績台数
(ピワセ漁場)
(黒三角は平均生産量を示す)

